

報告

## 養護教諭が行う看護技術の実施状況と自信の程度

岡田久子 坂本雅代 高橋永子 齋藤美和 藤田晶子 平瀬節子 尾原喜美子

(高知大学教育研究部医療学系看護学部門)

State of implementation of nursing techniques performed  
by school nurses and extent of their confidence

Hisako Okada Masayo Sakamoto Eiko Takahashi Miwa Saito

Akiko Fujita Setsuko Hirase Kimiko Ohara

(Kochi University Research and Education Faculty Medicine Unit, Nursing Sciences Cluster)

### 要 旨

養護教諭の教育背景は様々であり、看護教育を受けた養護教諭の割合は多くはない。しかし、最近の児童生徒を取り巻く健康問題の多様化に呼応して、養護教諭には医学的知識に基づく健康課題のアセスメントや判断・対応といった看護技術が求められるようになってきた。そこで養護教諭の看護技術の実施状況についての実態を知り、今後の養護教諭の教育について示唆を得ることを目的に、A県に勤務する小・中・高等学校、特別支援学校の養護教諭390人を対象に、養護教諭に必要な看護技術として《健康課題のアセスメント》8項目と《看護技術実践》14項目の実施状況と22項目の看護技術に対する自信の程度について質問紙調査を実施した。

回答は98人(回収率25.1%)であった。その結果、《健康課題のアセスメント》8項目中、主訴・生活習慣アセスメントを養護教諭が実施できている割合とアセスメントに必要な知識・技術についての養護教諭の自信の程度は、共に高かった。《看護技術実践》14項目では、創処置や感染予防が実施できている養護教諭の割合は高く、その実践に必要な知識・技術に対する自信の程度も高かった。心理的訴えへの対応には実施できていない養護教諭の割合は高く、その実践に必要な知識・技術についての自信の程度も低かった。この調査の結果から、児童生徒の健康課題をアセスメントし課題解決していく能力、健康課題への対応力、心理的訴えに対応するために必要な看護技術を教育の中に組み込んでいく必要が示唆された。

キーワード：養護教諭、看護技術、健康課題、教育内容

### Abstract

The educational backgrounds of school nurses are diverse. The rate of school nurses receiving nursing education is not high. However, with recent health issue diversification regarding school children, school nurses have been required to employ nursing techniques such as the assessment, determination, and management of health issues, based on medical knowledge. Thus, a questionnaire sur-

受付日：2010年8月1日 受理日：2010年10月4日

vey regarding the state of implementation of 8 items in <health issue assessment>, 14 in <practicing nursing techniques> as nursing techniques necessary for school nurses, and the level of confidence in 22 items of nursing techniques was conducted involving 390 school nurses working at primary, junior, or senior high schools in A Prefecture, in order to clarify actual conditions regarding the state of implementation of nursing techniques by school nurses and make suggestions for the future education of school nurses.

Ninety-eight school nurses (recovery rate: 25.1%) replied. As a result, Both the rate of school nurses who could conduct assessments of chief complaints and lifestyle habits and the level of confidence concerning knowledge and techniques necessary for assessment in school nurses were high for the eight items in <health issue assessment>. Regarding the 14 items in <practicing nursing techniques>, the rate of school nurses who could conduct injury treatment and infection prevention was high; the level of confidence concerning knowledge and techniques necessary for practicing these was also high. The rate of school nurses who could not manage mental complaints was high; the level of confidence concerning knowledge and techniques necessary for practicing these was low. The results of this survey suggest that the ability to assess health issues in school children and solve them, the ability to manage health issues, and nursing techniques necessary for managing mental complaints need to be incorporated into nursing education.

**Keywords:** school nurse, nursing technique, health issue, educational content

### 【緒 言】

教育現場では、児童生徒を取り巻く生活環境の変化を背景に、いじめ、不登校などのメンタルヘルスに関する問題、性の問題行動、喫煙、飲酒、薬物乱用、生活習慣の乱れ、アレルギー疾患の増加、新たな感染症など様々な健康課題が近年増えていることから、平成21年4月1日付で学校保健法は学校保健安全法に名称変更され、危機管理とそれに伴う児童生徒の心のケアが学校保健の中に位置づけられた。

養護教諭の職務は、学校教育法で「児童生徒の養護をつかさどる」と定められており、平成9年保健体育審議会答申には、救急処置・健康診断・疾病予防などの保健管理、保健教育、健康相談活動、保健室経営、保健組織活動など多岐にわたる養護教諭の主要な役割が示されている。それを受け、養護教諭の

職務遂行に必要な資質能力として、心身の健康問題に関する医学的知識や看護学的知識や技術、観察力・判断力・対応力等が重視されてきた<sup>1)</sup>。保健室来室時の初期対応として、三木<sup>2)</sup>は、児童生徒をベッドに寝かせ毛布で体を包みながら、バイタルサインの観察、五感を使っての触診、スキンシップ、タッチングを行う等、職務の特質や保健室の機能を生かした関わりをすることの重要性を述べている。これらの技術は、看護教育の中で培われていくものである。養護教諭養成課程においても、看護学を学ぶものの教育背景によって、看護技術の習得状況は様々であると考えられる。

以上のような現状から、養護教諭養成課程における看護技術に関する研究や養護教諭養成教育等の研究は数多くあるが、現職の養護教諭が行う看護技術の実施状況に関する研究は行われていない。そこで、養護教諭が行う看護技術の実施状況と自信の程度を明らかに

し、今後の養護教諭の教育について示唆を得ることを目的に、養護教諭が行う看護技術の実施状況と自信の程度について質問紙調査を実施した。

### 【用語の定義】

『自信の程度』とは、養護教諭が行っている看護技術に関する知識と技術についての自己評価とする。

### 【研究方法】

1. 対象者：A 県に勤務する小学校210人・中学校110人・高等学校58人・特別支援学校12人の養護教諭390人
2. 調査内容：
  - 1) 対象者の属性：年齢、勤務年数、養護教諭取得最終学校、看護師免許の有無。
  - 2) 養護教諭に必要とされる看護技術：《健康課題のアセスメント》8項目、《看護技術実践》14項目の計22項目（表1参照）。それぞれの項目毎に実施状況を3段階（①実施できている、②実施できていない、③実施する機会がない）、『自信の程度』を4段階（①自信がある、②まあまあ自信がある、③あまり自信がない、④全く自信がない）で評価した。
3. データ収集方法：無記名の自記式質問紙調査を実施した。各養護教諭宛に、調査用

紙と一緒に研究の目的・方法・倫理的配慮等を記した説明文書・返信用封筒を同封し、郵送配布した。回収は、対象者の自由意思で投函してもらった。

4. データ収集期間：平成21年10月1日～11月30日

5. データ分析方法：各項目別に PASW Statistics 18ver. を用いて記述統計量を求めた。

### 【倫理的配慮】

研究の参加は自由意思であり、参加を拒否しても何らかの不利益を被らないこと、個人情報取り扱い等の説明文書を各養護教諭に郵送した。なお、本研究は、高知大学医学部倫理委員会の承認を得て実施した。

### 【結 果】

回答は養護教諭390人中98人から得られた（回収率25.1%）。学校種別の回収率は、小学校23.3%（210人中49人）、中学校27.3%（110人中30人）、高等学校19.0%（58人中11人）、特別支援学校41.7%（12人中5人）であった。

#### 1. 対象者の属性

年齢50歳以上が49.0%、勤務年数30年以上が41.8%、養護教諭資格取得最終学校は短期大学が69.4%、看護師免許の有無は看護師免許なしが79.6%であった。

表1 養護教諭に必要とされる看護技術

健康課題のアセスメント 8項目	看護技術実践 14項目
「主訴に応じたフィジカルアセスメント」	「バイタルサインの測定」「感染予防の対応と指導」
「身体の部位別フィジカルアセスメント」	「創処置の技術」「包帯法の技術」「清潔に対する技術」
「行動や言動に応じたアセスメント」	「身体症状に応じた安楽な体位」「身体症状に応じた看護」
「生活習慣アセスメント」「心理的アセスメント」	「心理的症状に応じた看護（寄り添う・見守る等）」
「社会的アセスメント」「課題分析の枠組み」	「心理的訴えに対するプライバシーの保護」
「課題解決のプロセス」	「心理的訴えに対する受容」「心理的訴えに対する繰り返し」
	「心理的訴えに対する明確化」
	「心理的訴えに対する支持」「心理的訴えに対する質問」

## 2. 看護技術の実施状況

《健康課題のアセスメント》実施結果は図1に表した。「生活習慣アセスメント」84人(85.7%)、「主訴に応じたフィジカルアセスメント」82人(83.7%)など8項目中5項目は80%以上の者が「実施できている」と回答しているが、「課題分析の枠組み」37人(37.8%)、「課題解決のプロセス」37人(37.8%)が「実施できていない」と回答していた。《看護技術実践》実施結果は図2に表した。「創処置」92人(93.9%)、「感染予防」91人(92.9%)、「心理的症状に応じた看護」91人(92.9%)など14項目中9項目は80%以上の者が「実施できている」

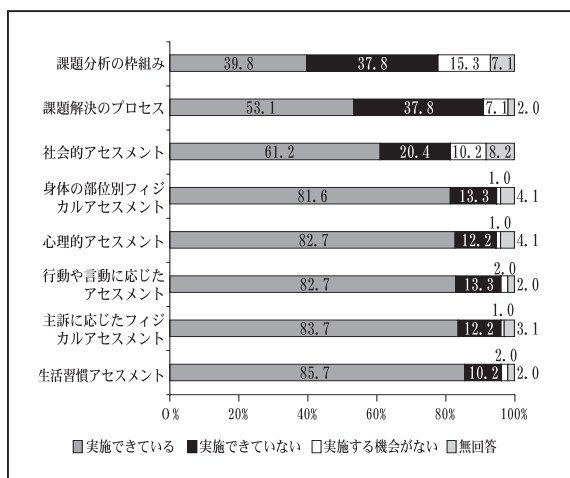


図1 《健康課題のアセスメント》の実施状況

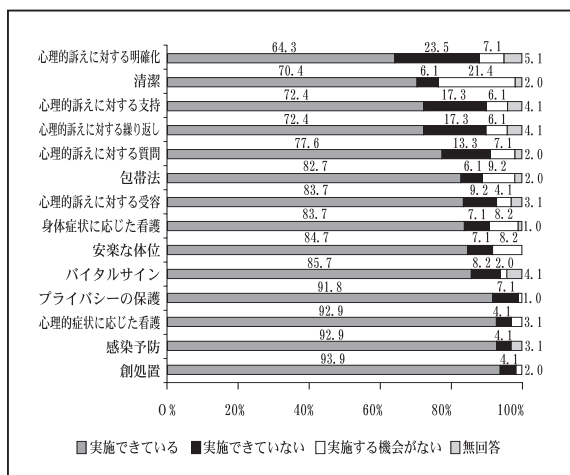


図2 《看護技術実践》の実施状況

と回答しているが、「心理的訴えに対する明確化」23人(23.5%)、「心理的訴えに対する繰り返し」17人(17.3%)、「心理的訴えに対する支持」17人(17.3%)が「実施できていない」と回答していた。

## 3. 看護技術の実施に対する『自信の程度』

《健康課題のアセスメント》に対する『自信の程度』を図3に表した。「自信がある」「まあまあ自信がある」と回答した上位3項目は、「生活習慣アセスメント」75人(76.5%)、「主訴に応じたフィジカルアセスメント」74人(75.5%)、「身体の部位別アセスメント」70人(71.4%)であった。8項目中5項目は60%以上の者が「自信がある」「まあまあ自信がある」と回答しているが、「あまり自信がない」「全く自信がない」と回答した項目として、「課題分析の枠組み」57人(58.2%)、「課題解決のプロセス」51人(52.0%)にも注目する必要がある。《看護技術実践》に対する『自信の程度』を図4に表した。「自信がある」「まあまあ自信がある」と回答した上位3項目は、「心理的症状に応じた看護」90人(91.9%)、「バイタルサインの測定」89人(90.8%)、「感染予防」88人(89.8%)であった。その他、「心理的訴えに対するプライバシーの保護」「創処置」「身体症状に応じた安楽な体位」「心理的訴えに対する受容」は80%以上の者が「自信がある」「まあまあ自信がある」と回答していた。「あまり自信がない」「全く自信がない」と回答した上位3項目は、「心理的訴えに対する質問」32人(32.7%)、「心理的訴えに対する明確化」31人(31.6%)、「心理的訴えに対する支持」29人(29.6%)であった。

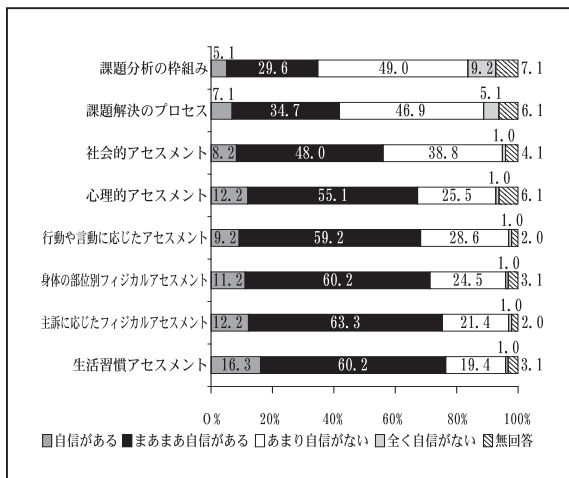


図3 《健康課題のアセスメント》に対する『自信の程度』

【考 察】

1. 《健康課題のアセスメント》に関する実施状況と『自信の程度』

実施状況が8割以上の項目は、養護教諭が児童生徒との関わりの中で直接捉える情報のアセスメントであり、特に生活習慣や主訴に応じたフィジカルアセスメントの実施と『自信の程度』は同じ傾向が見られる。これらは、児童生徒個々の生活習慣を踏まえ、訴えに応じた身体状況を判断する技術には自信をもった対応ができています。しかし、行動や言動に応じたアセスメントは実施8割に対して『自信の程度』は6割と低い。社会的アセスメントは実施6割、『自信の程度』5割であり両者ともに低い。これらは、児童生徒が態度として表している現象をどのように読みとるか、また、児童生徒を取り巻く情報を得ることの困難さが関係していると考えます。児童生徒は何らかの言語的訴えを持ち来室することが多いが、その言語的訴えだけでなく姿勢や表情・行動などの非言語的メッセージや児童生徒を取り巻く環境についての情報が大切となる。適切な情報を得て判断するには、系統的観察法を繰り返して行い観察技術を

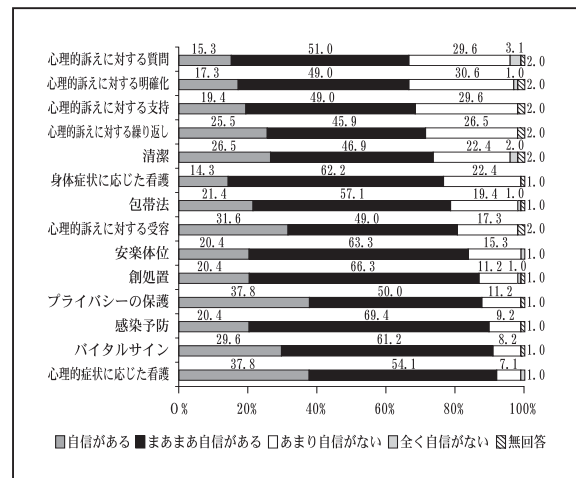


図4 《看護技術実践》に対する『自信の程度』

培い、日々の関わりから「いつもとちょっと違う」という直感的観察法にも素早く対応できることが必要となる<sup>3)</sup>。これらが身に着くことで、養護教諭としての知識・技術に対する自信へと発展すると考える。そこで、専門的知識をもとにヘルスアセスメントを丁寧に行い、児童生徒の訴えの“気づき”に始まり、的確に心身の観察や判断をしていくことが重要であると考えます。

児童生徒の健康課題に対する「健康課題分析の枠組み」や「課題解決のプロセス」は実施と『自信の程度』が同じように低い傾向が見られる。このことは、理論を活用する技術や問題解決の取り組みに対する技術を実施している養護教諭が少ないことを表している。児童生徒の健康課題解決に向けて、誰がどのように関わるか、その方向性を決めることは重要である。児童生徒を取り巻く背景要因を含めた健康課題は、各校の実情の違いと共に養護教諭のみでなく学校全体でチーム支援として関わる場合が多い為、課題解決に向けたプロセスの取り方にも違いがあり、そのことが実施と『自信の程度』に関係しているのではないかと考える。よりよい課題解決には、保健室来訪の三大主訴である頭痛・腹痛・不定愁訴

や不登校など児童生徒のヘルスニーズの発見と、その対処において看護過程のプロセスを取り入れることが、問題の所在を明らかにする有効なツールであると言われている<sup>4)</sup>。そして、養護教諭実践としても、実態把握・問題理解と課題発見・課題への取り組みがあり、このプロセスの活用の重要性が述べられている<sup>5)</sup>。また、人間的成長に関わる基本的ニーズにおける養護の見守りの視点として、生理的欲求の満足度・人と人との関わりの満足度・人間としての人権保障等が述べられている<sup>6)</sup>。そこで、養護教諭には、児童生徒の健康課題に向き合いながら、対象が求めているニーズは何かを把握していく中で、思考過程の振り返りや発達段階に応じて、児童生徒を理解する力が必要であると考えられる。

## 2. 《看護技術実践》に関する実施状況と『自信の程度』

《看護技術実践》項目については、全項目の6割以上が実施できていた。中でも、けがの手当てや集団に対する感染予防、児童生徒の心理的訴えに対して寄り添う・見守る等の心理的状況に応じた看護やプライバシーの保護は高く、実施と『自信の程度』は同じ傾向が見られる。これらは養護教諭が児童生徒に常に行っている内容であることや、「誰でも分けへだてなく受け入れる、訴えを親身に聞き対応する<sup>7)</sup>」という養護教諭の児童生徒に積極的に向き合う姿勢や態度が自信に結びついていると考える。しかし、自信があるのみを見てみると、「感染予防」「創処置」「身体症状に応じた安楽な体位」「包帯法」は2割程度であり、創傷の程度や感染症の発生状況や児童生徒の苦痛を取り除く対応としてより専門的な知識や技術を必要とする項目であることが伺える。また、児童生徒の心理的な訴えに対するカウンセリング技術としての「心理的

訴えに対する繰り返し」「心理的訴えに対する明確化」「心理的訴えに対する支持」「心理的訴えに対する質問」の実施状況は他の項目と比べて低く、『自信の程度』も自信のない割合が3割程度であり、両者ともに低い。三木<sup>8)</sup>は、カウンセリングは養護教諭の関わりと同時に進むものであり、カウンセリングを行うカウンセラーとしてのパーソナリティや養護教諭としてのパーソナリティとして人間観・健康観・教育観、養護教諭としてのアイデンティティが求められると述べている。心の問題への対応などはより専門的な知識や技法を必要とする技術である。養護教諭としての表現技術と共に、個々の事例を通して児童生徒と向き合う中で、その知識や技法を意味づけながら実践力を高めていくことが重要であると思われる。そのことが『自信の程度』に結びついていくのではないかと考える。そのためには、看護技術実践における知識と技術をどのように高めていくのか考えていく必要がある。児童生徒に安心感を与え安寧が図れるような看護技術やカウンセリング技術など児童生徒の健康課題に対応していく力をつけていくことが重要であると考えられる。

## 【結 論】

養護教諭が行う看護技術の実施状況と『自信の程度』から、児童生徒の健康課題をアセスメントし課題解決していく能力、健康課題への対応力、心理的訴えに対応するために必要な看護技術を教育の中に組み込んでいく必要が示唆された。

### 【研究の限界と課題】

本研究の調査時期は、学校行事やインフルエンザの対応のために養護教諭が忙しい時期に当たり、回収率が低くなった。限られた対象の研究となり一般化には限界があった。今後は、養護教諭の執務を考えた調査時期を設定するなど、対象の実情を踏まえた調査方法を考えていくことが課題である。

### 【引用参考文献】

- 1) 文部省：保健体育審議会答申．1997
- 2) 三木とみ子：四訂養護概説．225-241．ぎょうせい．2009
- 3) 中桐佐智子他：最新看護学 学校で役立つ看護技術第4版．68．東山書房．2007
- 4) 前掲3)．40
- 5) 藤田和也：養護教諭が担う「教育」とは何か．53-57．農文協．2008
- 6) 大谷尚子他：新養護学概論第1版．24-25．東山書房．2009
- 7) 前掲5)．124-125
- 8) 前掲2)．238

